

## 曲目紹介

### ◆ 日本抒情歌集

多くの人が子供の頃に歌った「叙情歌」のメドレー集。大正から昭和にかけて、瀧廉太郎、中山晋平、山田耕筰らによって大きく花開いた抒情歌は西洋風のメロディーに叙情感溢れる日本語の詩を載せ、愛唱歌として今も日本人の心の中で響いている。

大正浪漫を代表する画家・詩人である竹久夢二による『宵待草』、『花嫁人形』、知床を舞台にしたご当地ソング『知床旅情』、最後は海岸の風景をモチーフとした『月の沙漠』を故・中川信良の編曲で綴る。

### ◆ シンフォニア・パルナソス

この作品は、姫路パルナソス・マンドリン・オーケストラの為に書かれ2010年6月に初演された。

「パルナソス」というギリシャ神話に出てくる名前からヒントを得、アポロンとミューズ達が住んでいたという山パルナソス、詩や音楽の神ミューズのイメージで描かれた。

シンフォニア (Sinfonia) とはギリシャ語を語源とするイタリア語で「音が一緒に美しく鳴り響く」という意味を持っている。

「マンドリン・オーケストラの各楽器をできるだけ自然に鳴り響かせ、それほど難易度を上げずに最高の出来栄になるように」と意図された。

フランス古典主義の巨匠ニコラ・プッサンの代表作絵画のひとつ『アポロとミューズたち』は、音楽、弓、医術、予言を司る太陽神アポロンと、パルナソス山に集う学者、詩人、そして諸芸術を司る9人のミューズ達の扇状の人物配置や構図が、偶然にもマンドリンオーケストラの扇状の各パート配置と一致している点が興味深い。

### ◆ 悲愴序曲「受難のミサ」

作者鈴木静一（1901～1980）は450曲に及ぶ映画音楽、流行歌の作曲を手掛け商業音楽の世界で頂点を極める活躍をしたが、多くのマンドリン合奏曲、クラシックの編曲作品を発表し数多くの学生マンドリンクラブの技術指導にも情熱を注ぎマンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。

本曲は1970年に作曲され、岐阜マンドリンオーケストラ機関紙「フレット第14巻（1971年12月発行）」には以下の手記（抜粋）を残している。

「私が「悲愴序曲」を書くことになったのは、或る日FM放送から流れ出していた“日本26聖の殉教”のミサ曲であった。聴くともなく聴くうちに私は単声で合唱されるグレゴリオシャントにふと楽想を揺すられた。同時にその26聖人の磔（はりつけ）の絵画をどこかで見た事を思い出した。フィレンツェカトリノかはっきりしないが博物館か画廊であった。その時、磔柱にかけられた多くの殉教者の顔に日本人の面影は認めたがそれが日本26聖であることはかなり後から知った。そんなことでこの素材に手をつけたが、序曲などの意識なく書き始めた。それがいつとなく型とおりの序曲になって行くのに気付いたが不思議に抵抗は感じなかった。我国における所謂“キリシタン”の伝道は、織田信長・豊臣秀吉の時代にかけひとつのピークを築いたが、天正16年（1587年）に到り、それまで黙認していた秀吉が、突然布教を禁じ大阪を中心に近隣に存在する教会堂を破壊し布教者や信者を追放した。追われた人々は熱烈な信者であった島原の相馬氏をたより九州に流れ入り、相馬氏の居城、原城下には宏大な天主堂が聳え、附近に建てられたコレジオやセミナリオには神学生があふれ、祝祭日には鐘を響かせオルガンを鳴らし厳かなミサが行なわれるなど、まるでヨーロッパの都市とまごう盛況を呈したという。しかし世が徳川に移ると幕府のキリシタン弾圧は峻烈をきわめあの恐怖時代が来る。島原・天草の乱はかくして起こり、今日もカトリックのミサに残る“日本26聖の受難”はその時代の悲惨な殉教の一例である。」